

# 提 喻

利沢 幸雄

## 1 提喻とはなにか

### 1・1 提喻の登場

修辞学で＜<sup>トロピクス</sup>転義的比喩＞<sup>メタファー</sup>という、その主力はなんといっても隠喩であった。そしてその特殊なものとして提喻と換喩があるという考え方が一般的でさえあった。

隠喩以外の比喩が問題視されるようになったのは、直接的には散文によって小説や批評、思想や科学書が書かれて読まれるようになったことと関係がある。思考を追求したり文章の構成には、提喻や換喩、さらにはアイロニーの言語が中心的な働きをするからである。

旧修辞学では、提喻の換喩とのあいだでは、提喻のほうがよく知られていた。換喩がとくに注目されるようになったのは、今世紀になってからだろう。構造主義者たち、とくにプラーク学派のロマーン・ヤーコブソン（1956）が、換喩を言語構造上の二項対立の一つとして隠喩と対立的にとらえようとして以来、提喻のほうは影が薄れた。

たとえば「友人を訪問する」という内容の文を構成する場合のことを考えてみよう。まず「友人」にあたることばを思い浮かべる。「友人、ともだち、仲間、遊び仲間……」などと、相似した意味をもったことばがいくつが出てくる。その相似したことばの集まり、つまりパラダイムから、最も適していると判断される一つの語が＜選択＞される。次に「訪問する」にあたるものとして、「たずねる、訪れる、立ち寄る、押しかける……」などと、同様に数多くのことばが考えられる。かりにはじめのパラダイムで「遊び仲間」が＜選択＞されていたとすると、こんどは「押しかける」が相応だということになろう。かくて二つのことばを「遊び仲間」のところに「押しかける」というように＜結合＞させ、文が構成される。

文の構成の仕組を単純化したものだが、ヤーコブソンは言語の構造にはこのような二つの操作があるとし、前者を相似性からの＜選択＞、そして後者を隣接性にお

ける＜結合＞と呼び、隠喩的と換喩的とに分けている。たいへん興味深い言語構造についての考え方である。

＜選択＞と＜結合＞の二面性が隠喩と換喩とに典型的に表れているとヤーコブソンはいうのだが、注意しておかなければならないことは、その結果比喩言語が二つに分割され、あたかも転義的比喩は二つだけといった印象を与えることになった事実である。換喩は隠喩との二項対立の対立項となり、その存在感を強化させた。しかも『一般修辞学』の著者たちの意見によれば、ヤーコブソンは提喩の働きの一部を換喩に加え、混同している（『一般修辞学』佐々木、樋口訳、大修館）。

もう一つ付け加えるなら、ヤーコブソンの換喩への偏向には、たんなる一個人の思いつきではなく、時代の要請といった一面があるだろう。つまり彼は換喩を写実主義の主戦略としてあげているのだが、その写実主義の小説は十九世紀の後半から世に表れた。隣接、結合を主軸にする換喩や提喩などは、時代の人たちの思考様式と近代小説の隆盛と直接的な関係があるらしいのである。

## 1・2 提喩的思考

思考の様式として、隠喩がよく知っているものとの相似性による理解、換喩が場所、時間さらには因果関係をたよっての分析的考察であるのに対して、提喩は分析的な事象を＜統合＞していこうとするもので、全体的な把握に向かうという点では隠喩に近い。元来提喩は次のように考えられてきた。

種によって類を、類によって種を、あるいは部分によって全体を、全体によって部分を表す（ほかに単数によって複数を、複数によって単数を表す、を入れる人もいる）。

たとえば「バラは赤い」という事例を意識した人が、ほかに「スマイルは青い」「カタクリの紅色は紫をふくんでいる」などといくつかの事例を思い浮かべる。そしてそれらの事例から共通する一つの意味「草花には奇跡的な美しさがある」を受け取る。これが提喩である。「バラは赤い」は「草花には奇跡的な美しさがある」といった意味はない。意味がないのに意味をもたせるのは字義的ではなくて比喩的である。

これらいくつかの個別的な事例から、それらを統合して一つの共有の意味を引き出す言表を＜一般化の提喩＞と呼ぶのが適切であろう。反対に「草花には奇跡的な美しさがある」という意味を伝えるために個別的な一つの事例「バラは赤い」という比喩を使ったとすれば、それは＜個別化の提喩＞である。

これら二つの提喩を指摘したうえで、とりあえず日本の現代作家がどのように提喩を使っているか見てみよう。

(1)(イ)夜ともなると海のあちこちで夜光虫が青い光を発するのだ。(ロ)その原生動物の群れはちょっとした刺激にも敏感に反応し、泳いでいる私のまわりでも青々と光、手足を動かすたびにきらめいた。

丸山健二「踊る銀河の夜」

初め夜光虫と呼びながら(ロ)の文では「原生動物」と、類概念で呼びかえている。もっとも類概念とはいっても科学的な厳密さは必ずしも必要ではなく、俗説的な知識でもかまわない。それはなんらかの共通の要素を備えたものの集まりを指しているのである。

この例文では、夜光虫は種であり、それを類である原生動物と呼びかえたのはく一般化の提喩である。そう呼びかえることによって、原生動物という類概念がもつ意味素が前面に出てくる。つまり、夜光虫だとわたしたちはよく聞いており親しみがあって、なんとなく人間に近い。それを原生動物と呼びかえると、抽象的で機能的な「単細胞からできている動物」という意味素が前景化される。そして「青い光」を発するという現象によって、動物とも植物ともつかぬ感じの生物という類概念「原生動物」に付属した共示（コノティション）が、わたしたちとは極めて異質だという感じを与え、不気味さを意識させられる。

だが忘れてならないのは、語り手が夜光虫の異質性を強調するとしても、それがすべてではないということである。この類概念は「原生」ではなくて「動物」のほうが前景化されることだってありうる。そうすると化学物質のように青い光を放っていないが、わたしたちと同じく動物なのだという意外性の認識が生ずる。

もう一つ、同じ作品のなかから提喩を紹介しておこう。

(2)めまぐるしく点滅を繰返す青い海には、この世における、この惑星における自分の存在などどうでもよく思われてしまう不思議な力が秘められていた。

前の作品のほぼ同じ箇所から引用した。「この世における」と「この惑星における」とは文字通り「種」と「類」であり、「惑星」は地球の一般化の提喩である。「この世」も地球という天体の名称にはちがいないが、たいへん身近で聞きなれており、日常的庶民的である。だが「惑星」とすると違って来る。惑星は木星や金星といった太陽をとりまく天体である。地球を惑星という類を示すことばに置きかえると、生活と離れて虚空に点在する一つの天体という意味素が前景化してくる。

即物的、日常的なものから抽象的、思想的なものに変わってくるのがわかる。種から類への一般化の提喩は、このようにしてしばしば概念的、哲学的思考に結びつく傾向がある。

こうした種から類へという一般化の提喩を実例にあたって考察していくと、当然のこととして逆の類から種への個別化の提喩は、これと相反する分離的な傾向なのじゃないだろうかという考えが浮かんでくる。もしそうなら一般化の提喩と個別化の提喩とは相反する傾向の転義比喩であり分離させねばなるまい。そして一般化の提喩だけを提喩と呼び、個別化のほうは細分的、分析的思考と連結するよう思えるので、換喩に組替えるべきだ、そんな考えが湧いてきそうである。

この疑問は重要な意味をもつ。個別化の提喩を分析的な発想と思い込んでしまうと、提喩と換喩との混同ははじまる。事実混同されたことがあった。しかし違うのだ、提喩は一般化だろうと個別化だろうと、その底にあるのは統合的な思考であり、本質的な差異はないのである。次の例を見てみよう。

(3)こんな降り方では、きっと、都市全体が白い現象にすっぱり包みこまれているにちがいない。  
高橋たか子『怒りの子』

「白い現象」ということばが、白い自然現象、つまり雪であることは、「降り方」という属性と結びつけなくてもつかみ取れよう。雪を白い現象と呼び替えるのは、ほかにも霧や雲などでもそう呼べるだろうから、一般化の提喩である。しかし一般化とはいえ類に共通の「白い」というクラス素を採用していったことばである。つまり一般化の提喩でありながら一般化の根拠が明示されている点では個別化の志向も働いているのだ。一般化でありながら、同時に個別化の意図も見えている。もう一つ、もっと明確な短歌の例を上げておこう。

われもこう  
(4)吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ  
牧水

季節にかかる一般的な名称である「秋くさ」に対して、われもこう、すすき、かるかやは「種」である。それらの種から、変える根拠を明示しつつ「秋くさのさびしききはみ」と類が誌されている。

これは一般化の提喩である。だが一方で、われもこう、すすき、かるかやと草花の名が個別的にあげられていることによって、読者は自分の記憶や想像と具体的に結びつけるわけで、この点では一般化ではなく個別的な提喩の性格がある。しかしどんな結びつきがなされようと、結局それらはすべて「秋くさのさびしききはみ」として統合されるはずのものなのである。

提喩にあっては個別化と統合とは異なった言語ではない。草花の個別化は個々の草花が共有する「さびしききはみ」という素性を意識させ強調させていく技法なの

だ。個別化の提喩を併用しながら一般化の提喩を使い、そのクラス素を明示して自分の心情を共示している。多くの読者をもった提喩の詩人である牧水の詩情の原型をのぞかせた歌である。

(5)しかし正月以後、それらの客足も絶えた。皆、売るものがなくなったからである。そのために店はさびれ、主人も店員も、淋しげな顔つきをして、頬杖をついている日が多かった。武田泰淳「蝮のすえ」

中国文学にかかわった作者の文体は独特な比喩言語のよって構成されている。因果関係を示す換喩の言表で始まっているが、下線部分は提喩である。物のない時代で、店には売るのがなくなったので（理由を示す換喩）客は来なくなった。店の人たちは淋しげな顔つきをして、頬杖をついている日が多かった。これら三つの文の関係は、店に客が来なくても店員は頬杖をつくとは限らないから、

客足も絶えた	.....	（類）
店員が淋しげな顔つきをする	.....	（種）
店員が頬杖をついている	.....	（種）

である。一般化と個別化の提喩が同時に使われている。そこで目指す効果はそうした比喩表現の根拠を知らせることだ。武田は斬新な技法のモダニストではない。「頬杖をつく」が比喩的な言表だとしても、すでに小さな辞典にものせられている。平凡な提喩である。その平凡な提喩を二重に使って、その表現の根拠を呈示する。引用文は店の主人や店員を視点とするから、店の状態のほかに店員たちの心情も伝えたいのだ。それが「根拠」なのである。

以上いくつかの例で提喩がどんなものか理解できたと思われる。作者が意図したことをその普通の言い方よりも一般化した（あるいは個別化した）言い方で構成するのが提喩である。意図するところは一つの出来ごとの情報ではなく、いくつかの出来ごとから与えられるはずの普遍的な意味、あるいはその意味に対する語り手の心情である。解体ではなく総合である。「頬杖をつく」はそれが描く動作を越え、することがない状態を意味している。それゆえ提喩は字義的ではなく、<sup>ト</sup>隠喩と同様に<sup>ロ</sup>転義的比喩の一つなのである。

1・3 提喩と換喩

こうした提喩と対照的とされる換喩は「意味内容の隣接による名称の移動」と規

定される。意味内容の隣接という、「入れもの——中味」「生産者——生産」「原因——結果」など、さまざまな次元でのその例が考えられる。そのなかに「あるものとその付属物」がある。古くからよく知られている「王様と王冠」がその一例である。これと、同様に古くから著名な「船と帆」とが紛らわしい。こちらは「全体と部分」の提喩である。

「船と帆」と「王様と王冠」とのあいだにそれぞれの二つの語の結合について本質的な相違点が見出せるのだろうか。もし見出せないとなると、提喩と換喩との区別は名前だけで実質性が乏しくなる。

デュ・マルセの区別はよく知られている。彼によると、王様と王冠という二つの対象物間の関係は「名前を借用されたほうの対象物は、その名前によって観念が呼び起こされるものとは独立に存在し続け、両者が一つの全体をつくり出すことがない」という。それに対して提喩関係にある「二つの対象物間には結びつきがあり、二つの対象物が、全体とその一部のような一つの全体をつくるものと考えられる」のである。換喩だと二つの対象物が、読者の意識のなかで別個のものとして存在しうる。ところが提喩にあっては、両者が結びつき、一つのものになる傾向がある。

この区別の仕方は説得力があるように思われるが、「船と帆」と「王様と王冠」に適用したらどうなるか。王様と王冠の場合は、かりに泥棒がしのびこんで王冠を盗んだとしよう。彼は「王冠を手中にした」わけだが、この言表は完全に字義的である。王冠を物品として自分のものにしたという意味である。一方、比喩としての「王冠を手中にした」は貴金属の持主になることにはたいした意義はなく、王位に結びついているのである。つまり王冠は王位と結びつくから意味がある、だから比喩でありうるのだ。だがこの二つのものの結合の特徴は、王様と王様が身につける衣や剣と同様に王冠があるということであり、両者は別のものとしてわたしたちに認識できる。

「船と帆」の場合はどうか。「王様と王冠」と同じように考えられそうにも思えるが、これは広い海原の光景がある。子供が浜辺に立って沖合に船をさがす。やっと見つかった。実際に見えたのは白い帆だけだが、船だと思い込んでしまう。ほかの人もその判断を承認するだろう。帆は船の個別化の提喩であり切り放すことはできない。

『メタヒストリー』（1973）のヘイドン・ホワイトの二つの比喩の区別の根拠はもう少し明快である。彼によると換喩の構造は機械的なものであり、提喩のほうは有機体である。全体と部分とはいっても、機械だとしても部品が調子がわるければ、その部品だけをはずして新しいのと交換することができる。ところが生命体の場合はちがう。腕や木の小枝が具合がわるいからといって取り替えることはできない。

小枝はそれがついている木なしには存在しないし、存在することを考えることもできない。同時に小枝はその木全体の姿を見えさせる。現代作家の文章から、この実例を観察してみよう。

(6)黒い扉の向うに彼女の美しい脚が消えると私はどたどたと狭い階段をかけ上った。

武田泰淳「蝮のすえ」

これは転義的比喩を使った言表である。彼女の脚が視界から消えるといっても、脚だけがかってに動いていくわけではない。彼女の美しい脚が前景化され、語り手の意識の前面に突き出されているのはたしかだが、脚という部分は全体としての彼女と分ちがたく結びついている。個別化の提喩である。

全体と部分との結びつきは、あまりにも堅固で自然なので、かえって意識されないほどだ。だが結びつきの堅固さを実感できる簡単な方法がある。バラバラ事件のニュースがわたしたちの心に与える衝撃を思い浮かべればよい。その記事に「女性の手が出てきた」などと書かれているとぞっとする。手が体と結びついていないから、ぞっとするのである。この衝撃の本性は、生命体だと本能的に体全部と手足などの部分とを結びつけて考えようとするわたしたちの心理傾向を阻止することである。結局このときのわたしたちの衝撃は、生命体に対しては提喩的に働こうとする意識の傾向を阻止され、換喩的な現実<sup>トリアル</sup>に直面させられたために生ずるのだ。新しい文体上の技法は、主として転義的比喩を利用して読書の慣習的な心理傾向にゆさぶりをかけるものである。

引用文の作者も表現の効果は狙っている。しかし彼はモダニストではないから、比喩の転換によって読者の意識構造に亀裂を与えようとはしない。女性が魅力があるとすると彼女の心や体の各部分も魅力があるはずだ。したがって個別化の提喩が使われるのは常道である。作者は常道にたよった。ただ彼女の部分である「美しい脚」を、あたかもそあれ自身の意志で動いていこうとするかのように前面に押し出す。正統的な比喩言語の極限的な使用である。

ホワイトは転義的比喩について一つの言表をもとして説明を加える。

(7)わが恋人は一つの薔薇だ。

これが隠喩であれば、語り手は薔薇が愛する人の表象たるに十分なものと確言するもので、表面上は恋人とバラとは相違が明らかであるにもかかわらず、二つの対象物のあいだに相似性が存在すると主張する。だが、

「恋人と薔薇の＜同一視＞は、たんに＜ことば上で＞主張しているにすぎない。この文は美とか尊さとか繊細さといった恋人がもっている性質を表示するものとして、比喩的に受け取るように意図されているのである。＜恋人＞ということばは、特定の個人の記号として働いている。それに対して＜薔薇＞ということばのほうは、恋人に付随する性質の＜表 象＞あるいは＜象徴＞として理解されるのである。恋人は薔薇と同一視されるが、恋人が薔薇と共有する性質をほのめかしながらも、恋人の特性は保存しておく仕方においてである」

隠喩では、A というものに対して異なった対象物 B を結びつけ、A と B とのあいだに相似性があると主張する。その場合 A は文字通りのものを指す。恋人といえは実際に恋人を意味するのである。だが B のほうは文字通りに取ったのではだめで、A に付随する性質の表象あるいは象徴として理解しなければならない。バラは花としてのバラそのものではなく、美しさとか繊細さといった恋人がもっている性格を比喩的に示しているのである。

こうした説明のあとでホワイトは、もしこの文を換喩として読んだらどうなるだろうか、と説明を加えている。そのときは恋人は薔薇に還元される。つまり「わが恋人」は結局薔薇になってしまう。注意すべきことは、コイビトもバラも字義的だということである。さらにホワイトはこの文を提喩と考えて読む場合についても触れている。そして、「恋人の <sup>エッセンス</sup>本性は薔薇の本性と同一視できると考えることになる。」と書いているのだ。A が B と比較されるとき、隠喩であれば A は字義的だが B のほうは比喩的であり、A の特徴的な性質を表示している。換喩の場合は、B は A という名称を変更したものであり、隠喩の場合とはちがって A も B も字義的に用いられる。名称の変更ではなく「還元」ということばが使われているのは、たとえば、

(8)イ. 少年はなんども手を振った。

ロ. 老人はすだれを上げた。

といった言葉が、イは別れを惜しむ理由から（因果関係）であり、ロはその次に閉じ込められていた小鳥が飛びだしていくという時間的な（前後関係）で、隣接する別のものにたどりつく、という意味である。

## 2 提喩の種類

換喩と提喩とのあいだには紛らわしい部分があり、その理由についてはいちおう



説明した。換喩と比較していえば、提喩は分析的思考には属さない。分析は細分化に向って限りがないが、その個々の事実を総合的に捕えなおそうとする。部分のなかに全体を見、全体のなかに部分を見る。一般即個、個即一般というのが提喩なのである。「花」といえば「桜」であり「桜」といえば「花」(のなかの花)であるといった二つの対象物間の関係が、提喩の基本的な原理である。

思考の様式としての言語という観点からだと、提喩と換喩は＜統合的＞integrative と＜分散的＞dispersive とに区別するほうが、より根源的ではないかと思われる。

統合的な提喩の構成要素として、種 $\longleftrightarrow$ 類、部分 $\longleftrightarrow$ 全体があることはすでに触れたが、この性格に関しては『一般修辞学』の著者たちリエージュ・グループが木を例に取り上げてうまく説明しているので、これを利用したい。彼らによると、木は見方によって二通りに区別と統合が可能である。彼らのことばでいえば「根本的に異なる分解」が。

(1)一本の木を眺めて、それがどういうものからできているかを考えると、枝と葉と幹と根・・・からというように分けられる(配分的分解)

(2)木にはどういうものがあるかと考えると、ポプラ、柏あるいは樺・・・などがある(属詞的な分解)

(1)は全体と部分に当たるもので、枝や葉といった部分がなければ全体としての木は存在しない。すべての木は生命体として存するかぎり、葉や枝のような部分を持っている。それに対して(2)は種と類の関係にあたる。ポプラや柏がなかったとしても木は存在するという点で(1)とは異なる。この区分を用いると概念的に明確さをもってとらえられるので、これからは提喩を＜枝葉型＞と＜ポプラ型＞という名称で区別したい。それぞれに一般化と個別化とがあるわけである。

## 2・1 一般化の提喩

### 2・1 (イ) ポプラ型の一般化

リエージュ・グループは理論的には抜け目なく武装したあとで、どういうわけか「実をいえば、いかなる文学資料の中でも、一般化の提喩の例はほとんどみつけれられないであろう」といつている。

彼らの思い込みの根拠について、ほんやりとなら想像できないこともない。一般化の提喩の場合は個々の具象性が捨象され、一般的な概念として述べる傾向がある。したがって文学テキストの文章のように、イメージや感覚に訴えるようにして書か

れる場合には一般化の提喩はあまり使われないだろうし、使っても効果が薄いように思われる。同じところで彼らが「一般化の提喩が言述に抽象的なおもむき、すなわち哲学的な>おもむきを受けるであろうことは、容易に理解できる」といっているのだが、これも同じ考え方からの結論であろう。

この考え方に一面の真理がある。とくに実証性をもとに分析の方向をたどる言述であれば換喩のほうが適切のように見える。しかしリエージュ・グループの指摘にもかかわらず一般化の提喩はしばしば使用される。おそらく各国の言語の性格によると思われるが、日本の現代作家にとっては、最も主要な比喩言語でさえある。

(9)節子は茶碗の中でゆっくり揺れている液体をみつめながら、しばらく黙っていた。

柴田翔『されど、われらが日々』

文のなかの「ゆっくり揺れている液体」がお茶であることは、読者にはコンテキストからわかるようになっていく。だからこの「液体」ということばを見たとき、お茶を液体と呼びかけたな、と読者はただちに感じとる。

お茶→液体は、正確な意味で「種によって類を」表す一般化の提喩である。液体はお茶でなくてもよいからポプラ型である。わたしたちは科学書のなかででもなければ、お茶を一般化して液体と読んだりすることはないであろう。友人と喫茶店で会ったりしても、まず使わない。したがって、引用文中でお茶を呼びかえたことは異常であり、当然、文彩が生じるはずなのである。

このポプラ型の一般化の提喩の効果はなにか。それは節子が目の前にあるお茶をお茶と特定化できないでいるという心的状態を示している。三人称で書かれているが、引用文は節子の視点を通して構成されている。とくに「液体」ということばはそうである。視点人物だと、出来ごとの記述（外示）の過程でその人物の心情の共示が行われるという特徴がある。運ばれてきた茶碗を目にしたとき節子は、お茶と特定化するのが自然だろうが彼女はそれができなかった。なにかほかのことに心が捕えられているからである。そのときの彼女の複雑な心情を「彼女は考え込んでいた」といった明示的な言表を直接用いることをせずに、「茶碗の中でゆっくり揺れている液体」と、ポプラ型の一般化の提喩で表現している。普通であれば液体をお茶と特定化することなどだれにだってできるはずなのに、それができないことで、彼女の心の揺れ、屈折した気分を効果的に描き出している。

(10)それから二日か三日断続的に耳を出しただけで、彼女は再びその輝かしい奇蹟的な造形物を髪のうちろにしまいこみ、もとの平凡な女の子に戻ってしまった。

村上春樹『羊をめぐる冒険』

すばらしい耳のことを「その輝かしい奇蹟的な造形物」というポプラ型の一般化の提喩で言表している。造形物というのは芸術作品のことだが、生きた人間の耳を造ることができるのは神だけだろう。したがって人間の耳を造形物と呼ぶ人間は、創造主としての神を信じていることになる。だが引用文の語り手は、必ずしも信心深い人間には見えない。ただそうした因習的な考え方を、誇張した表現のためだけに利用している。前後関係からそんなふうに見える。

どんな効果が考えられるだろうか。意味は理解できるが感覚的な喚起力にはとぼしい。言い方が大げさだ、という感じがする。よくできた耳なのかもしれないが、それを「奇蹟的な造形物」といった一般化の提喩で捕えると、不適切と思える。神様の造った作品と呼ぶには根拠が足りない。これは誇張法なのだ。語り手自身そのことには気づいていて、隠そうとはしない。効果としてユーモラスな気分をうみ、作品に喜劇的な色調を与えることになる。

(11)おれの立っている四つ辻の広場は、まるで風をさえぎるものもなく、そのうえおれの肌は完全に近い熱の導体なので、外気よりも冷たく冷え切ってしまい、全身にはりついた雪はざらざらに凍って石英の粉のようだった。 安部公房「手」

「手」という題名は母の手のぬくもりなど、いかにも家庭的で人間的な感じを与える。しかし語り手が立っているのは荒廃した広場であり、厳しい気候状態が導体、外気、雪、石英の粉といった気象、金属などを連想させる科学用語で書いてある。そうしたコンテキストで自分の肌を「完全に近い熱の導体」と呼んでいる。一般化の提喩にはちがいないがこの引用文の前にある銅や鉄といった金属名のなかに、自分の肌を「完全に近い熱の導体」という名称で登場させている。異常な感じを与えるポプラ型の一般化の提喩である。擬人法とは反対に人体を物質として見る機会化の比喩である。人間という生命体を物質と並置させることで、物質的で抽象的な思考を文学作品のなかに取り込んでいる。

特異なこの作家の文学と人間観は彼の用いる転義的比喩の解明で主要な部分は捕えられるはずである。

これまでにあげた「ポプラ型の一般化の提喩」を整理してみると、

耳 → 輝かしい奇蹟的な造形物  
お茶 → 茶碗の中でゆっくり揺れている溶体  
肌 → 完全に近い熱の伝導体

これらはすべて話題の対象物をより大きな範疇で捕えなおしたものだ。お茶を液体と一般化するのは地球を惑星と呼ぶのと同じ一般化の提喩である。地球ではなくて惑星だと、平面、陸、海という日常感覚にもとづく空間ではなく、球体として捕えられる。地球から惑星への換称は、もとの名では忘れられていたわたしたちの空間の惑星という本性を前景化する。ある種の驚きが生れる。それに較べると、お茶を液体と呼ぶのはどうだろう。たしかにお茶は液体だし、ほかにコーヒーだってビールだって液体だし、飲めない液体だってある。お茶から液体への一般化にはあまり驚きは見られない。もしそこに毒でも入っていたら読者は不安だから、スリラーものとしては効果的だが。(9)の引用文を一般化としたが、必ずしもその区分は正確ではない。液体をお茶と呼ぶのではなく、液体をお茶と特定するのは個別化である。その個別化ができないために例文では一般化の提喩が使われているのだ。この文は対象物の本性の捕え方が狙いではなく、お茶と特定化できない節子の心が問題になっている。

とくにポプラ型の一般化の提喩は、ポプラがなくても木は存在しうることから、抽象的概念的な思想的なテキストで用いられる。地球を球体と見ると、国境の意味はどうしても薄れる。しかし、ここでは余裕はないが、一般化には単純化の作用もあるのだ。地球を惑星と一般化すると、地球だと付属しているさまざまな問題点や視点を消してしまし、回転する小さな球体として出現させる。

## 2・1（口）枝葉型の一般化

ポプラ型と比べると、この枝葉型の一般化の提喩ははるかに少ない。

⑫おれにとって、あの男は、その「手」の付属物にすぎなかった。 安部公房「手」

「手」は男の所有する体の一部であるはずである。しかしこの文で「おれ」が探しているのは特殊な手で、その空間的な位置関係を越え、逆に持主である男全体の存在意義を支えているのである。語り手にとって意味があるのは「その手」であり「あの男」のほうはどうでもよい。手は男の分割された部分であることをやめ、逆に男を部分とする全体と考えられているのである。

いずれにしろこれは枝葉型の一般化の提喩である。ポプラ型と違う点は、たとえば地球を惑星と呼びかえたとしても、地球なしでそれは存在しうる。木星や金星などでもいいからである。

枝葉型の一般化の場合だとそうはいかない。手とあの男とを名称交換したとしても、あの男がいなければ手はありえない。部分と全体とは同時に存在するし、存在

しなければならないのである。

## 2・2 個別化の提喩

### 2・2 (イ) ポプラ型の個別化

リエージュ・グループが実際に使われていると認めている提喩は、ほぼこの場合だけである。彼らは個別化の提喩についてこういっている。

「特にこれを多用しているのは小説の散文である。またヤーコブソンが換喩に対する<写実>派の偏愛について語ることができたのも、この範疇の文彩を念頭に置き、しかもそれを換喩と混合しているからである」

結局、ヤーコブソンは、個別化の提喩は換喩に入れてしまっているというのである。換喩が分析的で提喩は統合的な傾向を示すとすると、個別化よりは一般化の提喩のほうが多く用いられるはずと思うかもしれない。しかしそうではない。まずポプラ型の個別化の提喩の実例を見てみよう。

(5)しかし正月以後、それらの客足も絶えた。皆、売るものがなくなったからである。そのために店はさびれ、主人も店員も、淋しげな顔つきをして、頬杖をついている日が多かった。武田泰淳<蝮のすえ>

「頬杖をつく」は具体的な、つまり個別的な一つの動作である。だが目的をもってその動作をするわけではない。なにもすることがないことを示すだけの動作である。商売が成立つ条件にすっかり欠けているという状況を、個別的な一つの動作によって表そうとする。この動作をしなくても同じ意味の仕草はできるからポプラ型である。

(13) (イ) 春めいた<sup>のどか</sup>長閑な日だった。(ロ) 前の石垣の間から、大きな<sup>とかげ</sup>蜥蜴が長い冬籠りの大儀<sup>じつ</sup>そうな身体を半分出して、凝然と日光をあびている。(ハ) そういう午後だった。志賀直哉『暗夜行路』

直哉の文体の基本的な型と思われる例である。まず(イ)の文で、一般化の言表が提出される。春さきでまだ寒さが残っているのに<sup>のどか</sup>だったと伝えるだけで、これといった文彩はない。だが(ロ)の文になると、一転して具象的で映像的に、<sup>のどか</sup>な日の状況が描かれる。ポプラ型の個別化の提喩である。石垣の日だまりに、<sup>とかげ</sup>が体をのり出しているというのは、冬の寒さの残るなかに春が見えはじめた「<sup>のどかさ</sup>」の一つの具象例である。この<sup>とかげ</sup>は物語の筋の要素ではない。状況を象徴

的に示す指標の働きをしているだけである。だがこの文の文学的効果ははっきりしている。(イ)の一般的な言表を、具体的な一つの情景によって個別化している。それに続く「そういう午後だった」という(イ)の文は最初の(イ)の文と同じ働きをしている。初めと終りの二つの文が一般化の提喩となって、窓枠の働きをしているのである。

## 2・2 (ロ) 枝葉型の個別化

枝葉型の個別化の提喩は、全体のわりに部分の名を用いる転義的比喻表現として修辞学では扱われてきた。『一般修辞学』ではこの提喩は理論的に可能であり、多分実際に用いられているのだろうが、感じ取りにくいといっている。使われていてもあまり気づかず読みすぎてしまう、というのである

提喩や換喩は隠喩と比較するとかなり字義的と思われる例が多いことはたしかである。その国の言語の特性や文学の傾向によっても差があるだろう。しかし枝葉型の個別化の提喩はしばしば使われているのである。

(14) 駕籠からおりて、腰骨を叩きながらあたりを見廻すと、さすが品川、東都の喉口、たいした賑わいだ。まず馬が多い。軒端は殆んど馬の尻で埋まっている。

井上ひさし「江戸の夕立」

いかにも実感できる枝葉型の個別化の提喩である。馬の尻はその馬なしには存在しないから、馬が全体で尻はその部分である。

「おびただし数の馬」というように、提喩を使わずにすますこともできた。しかし並の表現では、馬の数のおびただしさを実感させることは困難である。そこでこの文では、馬の部分である尻を個別化し、前景化しているのである。宿場などで馬をつないでくと、目立つのはおそらく尻なのだろう。長い尻尾を振りまわして、蛇などを追い払いながら、かいばをくっているはずである。

このように個別化の提喩はポプラ型であれ枝葉型であれ、たいへんよく使われている。ただいくつかの実例で見たように、個別化の提喩を統合的あるいは哲学的に利用しようとするものはあまりない。普遍性の言述という衣をまとって実体は誇張法、その結果ユーモアをうみだしているというのが実情である。とくに私小説を純文学とする必然性をもっていた日本の小説では具象性を身につけた個別化の提喩のほうが似付かわしい。提喩であるために普遍的な要素をもち合わせてはいるが、同時に個別化であるために具象的な言表という印象が強いのである。

提喩も換喩も事実の伝達という働きを目指すことに変わりはない。しかしそれぞれ、独自の仕方で語り手の心情表出という内示性ももっているのである。換喩が、バッハの音楽→バッハ、緑の森→緑、町の人たち→町というように、対象語を修飾限定することばを対象語自体に格上げする。

提喩は、それに対して、頬杖←ひま、年越そば←越年、五千匹の油蟬←数多くの油蟬と対象語そのものを使いながら統合的な意味を加える。換喩がリアリズムを、提喩がロマンティズムを志向すると考えられる理由である。